

和紙の未来

2014 年にユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録された際には、本美濃紙の技法が国際的な注目を集めました。ここ数年、手漉き和紙の需要が減り、安価な木材パルプ製品に押されて、若者は伝統的な職業に就かなくなり、和紙業界は衰退の一途をたどっていました。1960 年代には、伝統的な和紙作りの技術を守り、紙漉き職人の見習いを受け入れて技術指導を行う「美濃和紙保全会」が設立されました。

美濃和紙保全協会の見習い会員が本美濃紙職人として認定されるには、少なくとも 10 年かかります。現在、本美濃紙工房として登録されているのはわずか 6 軒ですが、自治体や国の政府はその数を増やし、伝統工芸品や汎用性の高い素材として本美濃紙を普及させていくことに取り組んでいます。美濃市では、義援金により、本美濃紙継承者育成イニシアチブを発足し、新たな見習いの研修費用に充てたり、政府としては、和紙職人や用具職人の研修費を一部負担しています。また、政府は、一般向けのワークショップや和紙工芸の展示会にも資金を提供しています。

本美濃紙は、現在、スミソニアン博物館（米国）や英国博物館（英国）、ルーブル美術館（フランス）など、世界的な機関が所有する貴重な美術品や書籍の保全に用いられています。また、美濃紙職人は、2020 年オリンピック・パラリンピック競技会の公式表彰状用に美濃和紙を提供しています。

和紙は環境に優しく適用性もあり、最近では新しいコーティングや加工を施して、防水紙や断熱材、導電紙などとしても用いられるようになりました。紙布の生産は、江戸時代（1603～1867 年）、和紙生産地域で一般的でした。金や銀の錦は、しばしば金や銀を施した和紙糸から作られていました。明治時代（1868～1812 年）に入ると、綿や絹、ウール、化学繊維が普及し、和紙織物の生産は衰退していきました。最近では、その強度や柔軟性、通気性、滑らかな肌触りなどから、繊維メーカーが和紙に回帰しつつあります。